

筑後川遺産

櫨の道

毎年11月下旬から12月になると、

櫨はぜ並木が真っ赤に染まります。

櫨はその実から取れる蠟ろうが

和ろうそくや鬢付け油びんの原料になるため、

江戸時代に久留米藩の奨励作物として、

いたる所に植えられました。

苗木や蠟生産といった地域の生業を支え、

地域の文化にも影響を与えた櫨。

その歴史と現在の櫨の姿を紐解きます。

筑後川遺産とは

久留米市は、筑後川の流れがもたらす自然の厳しさや土地の豊かさ、利水によりもたらされる恩恵など、筑後川との関係のなかで歴史文化を育んできました。

市内各地には、筑後川により育まれた文化を背景とする、様々な物語（ストーリー）をいたるところで見つけることができます。この物語でつながれた歴史遺産のまとまりが「筑後川遺産」です。

CHIKUGO RIVER HERITAGE KURUME

筑後川遺産

登録 第3号

久留米藩 櫨年表

年代

櫨関連のできごと

享保15年	1730	亀王村庄屋・竹下周直、櫨を植え始める(農人錦の囊)
享保17年	1732	享保の大飢饉。久留米藩の年貢収入が普段の40万俵から8万3千俵に。商用作物として櫨が奨励される(久留米市史)
寛保2年	1742	御井郡国分村や三潯郡西久留米村鞍打に丹波屋鞍打基四郎、笠九郎兵衛らが櫨を植栽(石原家記)
延享4年	1747	那珂郡山田村庄屋・高橋善蔵「窮民夜光の珠」を記す。福岡藩、40人の大庄屋に書き写させて広める(日本農書全集11)
寛延2年	1749	家老有馬主膳、山守・鍵水九左衛門に命じ薩摩から購入した櫨苗1万本を生葉郡山北村大野原に植栽(吉井町史)
寛延3年	1750	竹下周直「農人錦の囊」を記す(久留米市史) 藩は「荒地櫨植立吟味役」を設立。空地・曽根筋への植立を奨励、収穫物の1/3を藩に納め、残りを地元を与えた(日本農書全集31)
宝暦元年	1751	筑後川中流部中洲(床島)用水と本川に挟まれた場所に共同櫨苗植立(日本農書全集31)
宝暦年間	1751~1764	竹下周直、宝暦年間に耳納山中腹で「松山櫨」発見(久留米市史)
明和元年	1764	領内櫨紋方許可制、焼印を渡す(「藩法集」御書出之類 八)
明和7年	1770	小郡町庄屋池内孫左衛門「孫左衛門の櫨木仕立て覚」記す(小郡市史)
安永4年	1775	大坂の蟬仲間問屋「戎座」に小郡の蟬屋が加入し、急速に発展(小郡市史)
天明年間	1781~1789	天明年間までに小郡の内山伊吉ら、「松山櫨」より「伊吉櫨」を作る(小郡市史)
寛政9年	1797	生蠶生産高3,000丸(約90トン) 18貫450匁の収入見込(田主丸町史)
寛政12年	1800	この頃より、櫨実直接上納から「印銭」「印銀」「運上銀」徴収に変更 印銭方役所の下役として「櫨実改役」を置く(田主丸町史)
享和2年	1802	農学者 大蔵永常「農家益」発刊(農家益)
文化13年	1816	産物方の統制下に御原郡乙隈村へ「蟬会所」を開設(小郡市史)
天保3年	1832	亀王騒動。竹下家に替わり大庄屋となった秋山勘九郎は「伊吉櫨」を奨励し、「松山櫨」から「伊吉櫨」へ転換進む(田主丸町史) この頃から藩の参政・田代守次の発案により、木蠶を買い集めて大坂で売りさばく産物仕組を本格化(日本農書全集31)
天保5年	1834	田中久重、折りたたみ式の「懐中燭台」考案(田中近江大塚)
天保14年	1843	佐賀藩の犬丸市之助、筑後國田主丸から仕入れた櫨苗木2万5千本を配布(犬丸家日記)
弘化2年	1845	商工業免許制。櫨実仲買印刷231枚、蟬船印札99艘(久留米小史)
文久3年	1863	今井栄が江戸より帰国。富国強兵のため、蠶生産などを奨励し専売制にする(小郡市史)
元治元年~ 慶応3年	1864~ 1867	茶・紙・蠶の利益で外国から7隻の洋式艦船を購入し配備 久留米藩は日本屈指の海軍国に(小郡市史)
明治13年	1880	福岡県が木蠶生産高1位、蠶製品を向上させるため、大阪蟬問屋の筑紫三次郎(のち筑三商店)、金沢泰次郎から蟬裝飾技術の習得を図る(鳥栖市史)
明治21年	1888	製蠶改良を目的として吉井町製蠶会社設立、明治25年に解散(吉井町史)
明治22年	1889	蠶の不況対策として県が補助金を出し、櫨畑から果樹・園芸園への転換を奨励(小郡市史)
明治24年	1891	製蠶業者のための生吉銀行設立(吉井町史)
明治26年	1893	製蠶業で蓄えられた資金により小郡に佐盟銀行設立(小郡市史)
明治31年	1898	第三回全国木蠶業大会が福岡市で開催(同大会事蹟報告)
明治34年	1901	筑後木蠶同業組合設立、事務所は久留米市京町に置く(近代における木蠶業の発展過程)
明治42年	1909	九州木蠶業同盟会より米国産パラフィン蠶、清国木蠶の輸入関税の引き上げを貴族院議長に請願(近代における木蠶業の発展過程)
大正7年	1918	筑三商店、久留米出張所(加工場・干場)開設(みやき町教育委員会歴史講座中級編研究紀要2012)
大正13年	1924	全国木蠶業連合会発足、櫨の苗木が無償配布される(「ハゼと木蠶」福岡県・福岡県特用林産振興会)
大正14年	1925	教科書に久留米市立山本尋常高等小学校の櫨の実収穫の様子が収録(近代教科書デジタルアーカイブ)
昭和9年	1934	福岡県木蠶工業組合結成、海外に白蠶輸出増加(近代における木蠶業の発展過程)
昭和18年	1943	第二次世界大戦の食糧増産政策で薪不足となり櫨実生産が半減(近世以降における日本木蠶業の発達、鳥栖市史)
昭和21~25年	1946~1950	第二次世界大戦後の農地解放により、大半の櫨が伐採(小郡市史)
昭和30年	1955	日本木蠶商工業協同組合設立(全国10社うち筑後地方より6社)
昭和39年	1964	柳坂曾根の櫨並木が福岡県天然記念物に指定される(福岡県)
昭和45年	1970	兜山に5,000本の櫨の植樹(西日本新聞)
昭和58年	1983	久留米市で初の櫨シンポジウム、ハゼまつり開催(西日本新聞)
平成6年	1994	新・日本街路樹100景に「柳坂曾根の櫨並木」が選定される(読売新聞)
平成9年	1997	日本一櫨ろうそく(高さ102cm)製作(久留米市歴史散歩No.4)
令和7年	2025	久留米市、「櫨の道」を筑後川遺産第3号に登録



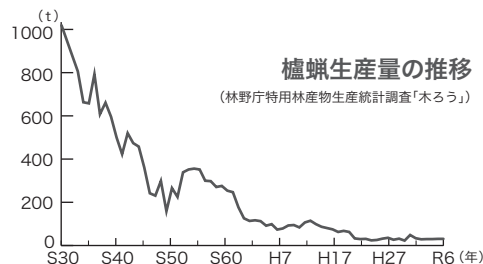
大蔵永常著「農家益」。大蔵は江戸時代3大農学者の1人。ハゼノキの栽培法と製蠶技術を解説し、松山櫨が非常に優れ、接ぎ木で増やしたため、九州筋に広まったと記述している。



千歳丸(せんざいまる)。久留米藩保有7隻の軍艦のうち、最も大きかった。戊辰戦争に参加するなど、藩を代表する船だった。(久留米市教育委員会)



三井郡山本尋常高等小学校の校庭東端の櫨の実収穫の様子。(尋常小学校国定地理教科書)



令和8年3月 発行 久留米市教育委員会
編集 筑後川櫨のあかりを灯す会

お問合せ 久留米市 市民文化部 文化財保護課
TEL 0943-30-9322 FAX 0942-30-9714
E-mail bunkazai@city.kurume.lg.jp



「筑後川櫨のあかりを灯す会」は櫨にまつわる活動をしている「柳坂曾根の櫨並木保存会」、「久留米筑水高校」、「エンザイ緑販有限会社」、「松山櫨復活委員会」が合同で発足。主な取組として、櫨の情報発信や櫨の接ぎ木・剪定等の技術継承、櫨を活用した関連イベントの開催などを行っています。